

千本釈迦堂の花見

——『春のみやまち』注解稿(三)——

佐藤恒雄

一

本稿は、「栗・柑子様の箱、玻璃小盃——飛鳥井雅有日記を読む」(『出版ダイジェスト』平成十四年十一月二十日)、「御鞠の負けわざ——『春のみやまち』注解稿」(『広島女学院大学国語国文学誌』第三十五号、平成十七年十一月)を承ける、第三稿である。今回は、千本釈迦堂の花見を中心に、三月四日から十三日までの記事を取り上げる。

平野神社蔵本の本文を基に、漢字をあて、原本文をルビとして残しながら、記事をたどると、以下のとおりである。

四日。過ぎにしころ、目勝りの負けわざの花、あまりに責められまいらせて、八重桜一枝、紅梅一枝、柳の枝に梅・桜の花を取り合わせて付けて、白き薄様を切りて「咲

かせつるかな」と書きて付けて、内裏へ持ちて参りぬ。やがて御所へ召し入れらる。人々は思ひ思ひに、花の枝に詩一つ、あるひは歌一つを付く、いと興あり。今日は、内裏・東宮に御鞠あり。身を分けたくは思へども、叶はねば、甲斐なし、御師匠なれば、東宮へ参りぬ。

御鞠より先に、内裏より、頭督と同車して、毘沙門堂の花見に渡る。皆までは咲き揃はねども、梢ども遅れ先だつ色見えて、いと面白し。

五日。東宮の朝餉の御壺にて、二人づつの花づくの勝負の御鞠あり。右勝ちまいらせて、やがて八重桜の枝に梅の数珠を懸けられて、下し給はりぬ。引き籠めがたくて、内裏へ持ちて進ませたれば、「ことさら色も匂ひも添ひたる御心地す」とて、御手づから取らせ給ひて、入らせおはしましぬ。

六日。内の御鞆あり。人数なくてあひなし。夜べに成りて、「月おぼろにて、ことに艶ある夜なり」とて、女房たち一輛、おとこ一輛「予・俊定・業顯」、毘沙門堂・持明院殿まで、駆けありく。女房・男、連歌も侍りしやらむ、忘れ侍りて書かず、口惜し。花の枝手ごとにまでこそなけれど、折りて歸りまゐる。

七日。花山院の右府入道の栗田口の山莊へ、新院御幸なるとて、「御鞆あるべし、まゐるべし」とて、入道のもとよりも、又奉行重清がもとよりも、使あり。足を損じて参らず。

「今日はことに風あらし、明日ともたのまれぬ風の前の花なり、夜べのなごりもたえがたし、限りの木ぞ多ゆかし」など、女房の中より申しいださるれば、夜べなかりし殿上人ども、「今日見ざらんには、この春はさてこそは」とて、この翁一人をなにのゆへとなく責めたり。「今日は御人づくななり、な罷かりそ」とて、「御連句の坐に、能発の尉を召しおけ」とて、捕へられて伺候したり。残りのものども、季顕朝臣・業顯等、「いかがして」と、やうやうに申す。雅藤、職事なれど、数寄心にあるものにて、御連句にさぶらふも心そらなり。俊光も執筆するそらもなし。やうやうにして逃げいでて、女房にこの翁の車をまゐらす。隆

氏朝臣の車に混みのりて、千本へゆく。

暮るるほどの花の色、いとおもしろし。さるほどに、雨おびただしく降る。いづくよりかたづね出でたりけん、傘を一つもとめ出でたり。「ぬるとも花の陰にこそ」とて、なほ去らず。しばしこそあれ、あまりなれば、「ぬれじと傘の下にかくれん」といひて、走り入りぬ。其の後、人々みな屈まり立り。雨やみげもなく降れば、長廊のもとへ、女房車やりいれて降ろしつ。晴れ間、つほど、「いざ、念仏申させて聴かん」とて、僧どもそのかして、釈迦念仏一時礼賛、一時申さす。其のほどにぞ、晴れぬる。「この雨は花のためは憂けれど、菩提のたねとはなるらむ」など、女房も興に入りて申さる。思ひいでなるべし。

帰りさまに尾張の守仲綱入道、もとより隠りゐて侍りしが許へ、かけて逃げ侍りし。

暮れぬとて今日こざりせば山ざくら雨よりさきの色を見ましや

皆々人々は、道より別れぬ。今、ただ雅藤・業顯ばかりに帰参りぬ。なほ雨ふる。さらばとて、此の人々を引き連れて帰りて、夜もすがら物語してぞ遊びぬる。

八日。(第二稿で取り上げたので、省略する)。

九日。内裏より、殿上人三四人、六位一人、一つ車にて、

東 山の花を見る。

十三日。季御読経始めらる。「今日は、賀茂の一切経会なり」とて、隆氏朝臣・経雄・業顕、一・車にて、内裏より物見に参る。齋果つる程に、御所の屋の広廂にて、酒のみて帰るに、猶飽かず。「いさや、いづくへまれ、行きて遊ばん」とて、四条の少将知れる傾城の許へ行くに、差し合ふことありとて空しく帰るに、「さらば」とて人々押し入れば、力なくて、又酔ひ勧む。経雄あひ知れる女房二人、いづくよりか尋ね出しけん、率てきたり。明くるまで遊び、物の音鳴らし、人々朗詠し、言ひ知らず面白し。この傾城も、道とはなくて、一世などいふ。興ありしことなり。

二

右の本文の記事について、十分にことばを補いながら現代語訳して示すと、以下のようになる。

四日。先日の花づくの目勝りの勝負で右方が負けてしまった、その負け業の「花」を、左方の内裏様からあまりに責められましたので、八重桜一枝と紅梅一枝を用意して、柳の枝にその梅と桜の花をうまく取り合わせ付けて、白い薄様を細く切つて短冊とし、「咲かせつるかな」（昔からみ

んなが望んできたとおり、みごとに咲かせましたよ）と書き付けて、内裏へ持参した。すぐに御所へ召し入れられて、献上する。他の右方のメンバーもそれぞれ思い思いに、花の枝に詩一編を、あるいは歌一首を書き付けた趣向の品を差し上げて、たいそう興趣深かった。今日は、内裏と東宮御所の両方で鞠の会があった。身を二分して両方に参加したいと思つたけれども、それは不可能なのでどうしようもない、師匠だから東宮の鞠の会に参加した。

その鞠の会よりも前に、内裏から（甥の）頭兵衛督為世と同車して、毘沙門堂の花見に行つた。全部までは咲き揃つていなかったけれど、木々の梢は早く咲いたり咲き遅れたりと様々で、たいそう趣き深く見る甲斐があった。

五日。東宮御所の朝餉の間に面した練習用の鞠庭で、二人一組の花づくの勝負の御鞠があった。今回は右方が勝ち申し上げて、左の東宮方から負け業として、すぐ八重桜の枝に梅の花の数珠を懸けられた趣向の品を下賜された。そのまま私のものとして引きだめてしまふのも惜しくて、内裏へ持参して献上したところ、「これは特別に色つやもいいし匂いさえ付いてる気がするね」とおっしゃって、御手づから受け取られ、奥にお入りになった。

六日。後宇多天皇内裏の鞠庭で、御鞠の会があった。参

加した鞠足の人数が少なすぎて、興が乗らず面白くなかった。夜になって、「月がおぼろにかすんで、格別に優艶な夜だ（桜が綺麗だろうなあ）」というので（皆の意見が一致して）、女房たちが一輛の車に、男たちも三人（私雅有と蔵人藤原俊定と少将源業顕）が一輛の車に乗り込んで、毘沙門堂から持明院殿まで、（桜の花をたずね）車を駆って逍遙した。女房と男たちは、一緒に連歌もしたでしょうが、あいにくと忘れて書き留めなかったのは、残念だった。花の枝を手ごとというほどではなかったが、（土産として）折り取って帰ってきた。

七日。花山院の右府入道藤原定雅公の粟田口の山荘へ、新院である龜山院の御幸がおりだとかで、「御鞠の会が予定されている。参加するように」とのこと。入道からも、また当日の鞠の奉行である藤原重清の許からも、招集の使があつた。しかし私は足を傷めていて参加できない（旨の返事をした）。

（二方内裏では）「今日はひどく風が強いわねエ。こんな風に吹かれたら明日までも持ちこたえられそうもない風前の花といったところよねエ」。「昨夜の感激の名残も忘れられず、我慢できないワ。今年最後の木末の花が見たいワ」などと、女房の中から言い出されたので、昨夜の花見に参

加しなかった殿上人たちも、「今日見なかったら、私たちはこの春の桜を見ないまま終わってしまう。（何としても見に行きたい）」と言って、この年寄り一人を何の故ともなくむやみに責め立てている。「今日は御前に祇候の人が少ない。帰ってはならぬ」「（天皇も参加される）御連句の席に、連句に巧みな老練の翁を、召し置いて帰すな」ということで、捕まえられてやむなく伺候していた。私以外の者たち、季顕朝臣や業顕らも、「何としてでも（この座を逃れて、花見に行きたい）」と、様々に言つて（私に訴える）。雅藤は蔵人で（連句を主催する立場に）あるのに、格別に数寄心の強い男なので、御連句の座に控えていても、心は上の空である。書記役の俊光も、筆を執つて満足に記録することすらできないような体たらくである。やつこのことで（連句が終わり）、逃げるようにしてその座を離れ、女房たちに私の車はお貸しする。私は隆氏朝臣の車に混み乗つて、千本釈迦堂へと目指して行く。

日が暮れかかる時刻の桜の様子は、まことに趣き深い。（皆で境内の桜を堪能している）そのうちに、いつのまにか雨がひどく降りはじめた。どこから探し出してきたのか（誰かが）傘を一本求めて持つてきた。（しかし風流がる男たちは）「濡れたつてかまわぬ。（花見にきたのだから）花

の陰に雨宿りといこうよ」と言つて、なおも桜の花陰を立ち去らない。しかし、しばらくならまだしも、あまりに長くなると（我慢できなくなり）、「濡れじと傘の下にかくれん」（濡れまいと傘の下に隠れよう）と言つて、みな傘の下に走り入つてきた。その後、男たちはみな傘一本の下に屈まり立つていた。しかし、雨はいっこうに止みそうな気配もなく降り続くので、長廊（中門のある長い建物の廊）のもとへ、女房たちの乗った車を引き入れて女たちを降ろした。そこで晴れ間を待つてゐる間に、「さあ、念仏を唱えさせて聴聞しようではないか」ということで、僧侶たちを語らい勧めて、「釈迦念仏の一時礼賛」を、一時の間唱えさせた。そうしている間に、雨は晴れたのだつた。「この雨は花のためにはつれない雨だつたけれど、（後世を願う）私たちの菩提の種とはなるでしょうよ」などと、女房たちも面白がつて言つていた。きつといい思ひ出になるにちがいない。

報恩寺からの帰りに、前尾張守藤原仲綱入道が、出家して以来隠居している家を目がけ、逃げるように駆け込んだ。暮れぬとて今日こざりせば山ざくら雨よりさきの色を見ましや（日が暮れてしまったからとあきらめて今日やつてこなかつたら、雨にあう前の山桜の美しい姿を

見ることができたでしょうか。よくも今日きたものでした。）

この花見に参加した人たちはみな、途中から別れ別れになり、今は、藏人雅藤と左少将源業顕だけが残つて、私と一緒に帰つてきた。なおも雨は降り続けている。それならばと、この二人を引き連れて我が家に帰り、一晚中寝ずに世間話をして遊んだ。

九日。内裏から、殿上人三四人と、六位一人が、一つ車に乗り込み、東山の花見に行つて楽しんだ。

十三日。今日から内裏で、季御読経を始められた。「今日は、賀茂神社の一切経会がある」というので、隆氏朝臣・経雄・業顕と私の四人が、同じ車に乗り込んで、内裏から見物に出かけた。（季御読経の）ご齋会が終わるころに（内裏に帰参し）、御所の殿舎の広廂で、酒を飲んで帰つたのだけれど、なお飽きたらなくて、「さあ、どこでもいいから、出かけていつて遊ぼうではないか」と誘いあつて、四条の少将隆氏が旧知の傾城の許へ行つたのであるが、差し支えがあつて相手ができないとのことと、空しく帰つてくる。「そうとなれば、致し方ない」といつて、人々が我が家へ押しかけてきたので、どうしようもなく、またみんなに酒を勧めて飲ませた。その席へ、経雄がよく知っている女性二

人を、いったい何処から探し出してきたのか、引き連れて現れた。彼女たちを加えて夜が明けるまで飲を尽くして遊び、楽器を演奏し、人々は思い思いに朗詠をして、言いようもなく面白かった。経雄がつれてきた傾城二人も、代々その道に携わってきた専門の白拍子ではなく、彼女たちの代からこの道に入った一世の傾城だとのこと。興味深い話である。

三

四日の日の、「負け業の花」は、「花づく」の「目勝りの勝負」の結果に伴うものであった。「花づく」は、花の限りを尽くす、花次第、花の結果などを意味することばで、「づく」は、賭けをすること、また賭ける物を意味する語。ここは「花」を賭け物とすること。同種のことばに、「錢づく」（「いかさま錢づくは、連歌には口惜しきことか」、了俊『落書露頭』）と「絵づく」（「天福のころ、院・藻壁門院、方を分かちて、絵づくの貝おほひあり」、『古今著聞集』卷十一・四〇三話）がある。「目勝り」は、賽子を振って数の多い方を勝ちとする遊びで、賭物が付随する。個々の勝敗をトータルしたその日の結果は、左方が勝ち右方が負けてしまった、その勝ち方に購う品物も「花」が趣向の

中心となる遊びだったはずである。

この日雅有たち右方が用意した負け業の品に添えた「咲かせつるかな」の後ろには、諸注一致して指摘するとおり、

（題不知）

中原致時朝臣

梅が香を桜の花にははせて柳が枝に咲かせてしがな

（後拾遺集・春上・八二）

の歌がある。新日本古典文学大系『後拾遺和歌集』は、「春の植物である「梅」「桜」「柳」の特性を、それぞれ「香り」「花」「枝」と捉えて、それらが一体となれば、さぞすばらしいであろうとの夢想」と的確に施注している。この三つの取り合わせが趣向の眼目で、周知の古歌をふまえ、その一部を開示するという二重の趣向によったのであったが、この日の趣向はすぐその場で、後宇多天皇と左方の面々の反応を確かめることはできなかった。左方のメンバーは、そもそも集ってはいなかったはずである。その不充足感が、五日の記事に反映していると思われる。

さて、五日の日の「梅の数珠」について、諸注は以下のとおりである。①施注なし（渡辺『影印校注』）。②「梅の数珠（梅の種子を磨いて珠とした数珠。当時としても高級なものではない。高級品には水晶の数珠などがあった）」（水川『全釈』）。③「五十年以上を経た梅の古木から小さな

玉の数珠を作る」(浜口『注釈』)。④、①と②をあけて「どちらか不明」とする(外村『全集』)。⑤「梅の木を削り小さな珠にして作った数珠。「菩提子桑槐黑柿紫檀梅木等皆性不脆者為佳」(和漢三才図会一九・神祭仏具)」「渡辺『集成』。以上、いずれもすべて、梅の木を細工して作った本物の数珠と解する点で一致している。

しかし、果たしてそうであろうか。ここは「花づく」の勝負の負け業として敗者(左方の東宮ご自身)から雅有に贈られた品物なのだから、「花」そのものの趣向でなければ意味がない。梅の古木から作った数珠を、八重桜の枝につけて何の趣向になるというのか。仏教関係の趣向なら何らかその説明があつてしかるべきであるのに、それはない。この場合、八重桜は遅く咲く種類の花だから、現に咲いている枝そのものであろう。当季の花がある時に造花を用いることはない。一方の梅は、いち早く咲いてすでに花の季節は終わつていたにちがひなく、ならば、これは造花であつたと見なければなるまい。小さな梅の花冠に糸を通して連ね、数珠状にした品物を「梅の数珠」といい、それを満開の八重桜の枝に取り合わせて付けたところが、趣向の眼目であつたと思われる。引き込めがたくて、内裏へ持参し献上したところ、「ことさらに色も匂ひも添ひたる御心地す」

と、お褒めのことばを賜つて面目を施したというのも、梅と桜の花を一枝に取り合わせた趣向だつたからである。雅有が後宇多天皇内裏へ東宮制作の品を持参して献上したのは、東宮のセンスのよさを天皇にもお見せして共感をえたという素朴な気持ちによるであろう。

四

六日の記事に出てくる「毘沙門堂」の桜は、二日前の四日、藏人頭兵衛督為世(為氏と雅有姉との間の嫡男)といつしよに見物に出かけ、偵察済みであつた。咲いている枝、まだ咲いてない枝とまちまちで、それはそれで風情ある咲き具合だったが、二日後の六日には、そろそろ満開かと、鞠の会もそこそこに、女房たちと男たちが車二両に分乗し、毘沙門堂からさらに持明院殿まで、桜を求めて逍遙したのである。

「花の枝手ごと」にまでこそなければ、¹「見てのみや人に語らむ桜花手ごと」に折りて家づとにせむ」(古今集・春上・五五・素性)を引歌とする。また、「遅れ先だつ色見えて」には、「末の露本の雫や世の中の遅れ先だつためしなるらん」(新古今集・哀傷・七五七・僧正遍昭)が、本来の無常観を薄め、遅速だけを取り出して引歌としている。西行

も同じ歌を本歌として「散ると見ればまた咲く花の匂ひにも後れ先だつためしありけり」(山家集・雑・七七二)と詠んでいた。

七日の記事中の「濡るとも花の陰にこそ」の部分にも引歌がある。「桜狩り雨は降りきぬ同じくは濡るとも花のかげに隠れむ」(拾遺集・春・五〇・読み人しらず)がそれで、「どうせ濡れるのだつたら、花の陰に隠れて風流を演じきろう」と洒落たのである。

七日の記事中の、「御連句の坐に、能発の尉を召しおけ」の「能発の尉」について、意味するところは、「(連句の)才気煥発の老人」(②水川『全釈』)、「発句に巧みな翁」(①渡辺『影印校注』)「発句に長けた老人」(⑤渡辺『集成』)であるにちがひなく、それらをまとめた④外村『全集』注の、「能発」という例はあまり見えないが、ほめ言葉であるう。「能」はよくできること、「発」は起すことか。『嵯峨の通ひ路』に「方々能ありて」とあり、野曲・琵琶・競馬・和歌・鞠にたけた人物についていう。「才気煥発の老人」(全釈)、「発句に巧みな翁」(影印)、「尉」は老人の意の傍線部以外は正しい。「連句や発句に巧みな老翁」の意である。ただし訓みについては、①渡辺影印・⑤渡辺集成は「よきはつの尉」とし、その他の②全釈と④外村注は「のう

ほつの尉」とする。③浜口氏『注釈』は、「能発」は熟語ではなく、省略形であろう。「発」は平野神社本・書陵部本が右傍に「ほつ」とするように、訓は「ほつ」で発句の省略、渡辺氏の注の意であろう。「能」と「おきな」と「ぜう」は縁語と考えたい。ただし訓は決め難いが、一応「ほつ」との関連で「のう」と音読しておくとする。縁語はともかく、訓読については、「能書」(書をよくする・書に秀でる)「能画」(画を上手にえがく)の語があるので、その類推で、「ノウホツの尉」と確定してよいと考える。

五

さて、「雨やみげもなく降れば、長らうのもとへ、女房車を遣りいれて降ろしつ」の、「長らう」とある部分についての解釈は、二つに分かれる。

一つは「長老」の字をあて「チヨウロウ」と読んで解するもので、これまでの大多数の注釈書はこの解をとる。すなわち、①渡辺静子氏、「澄空上人(如輪上人)。生没年未詳。大報恩寺の長老。」(『影印校注』)、③浜口博章氏、「大報恩寺の長老如輪上人」(語釈)、「長老の住居に、女房の車を差し向けて降ろした」(『注釈』)、②水川喜夫氏、「とりあえず、(千本閻魔堂の)長老の住む建物へと逃れ入る」(氏

は千本釈迦堂の花見ではなく、近くの千本閻魔堂の花見とみて、詳しく考証しているが、否（『全注釈』、④外村南都子氏、「大報恩寺の長老。澄空（如輪上人）か」（『全集』）の四注釈である。一方、「長廊」の文字をあてるのは、⑤渡辺静子氏（若干解釈を変更されたと思しい）のみで、脚注に「大報恩寺の長廊。一説に大報恩寺の長老如輪上人（澄空）とも」（『集成』）としている。数の上でも「長老」と解するものが圧倒的に多い。

『徒然草』（二二八段）に、「千本の釈迦念仏は、文永の比、如輪上人、これを始められけり」とあり、岩波文庫の注（安良岡康作）には、「澄空。摂政、藤原師家の子。大報恩寺第二代。生没年未詳」とある。前記諸注はすべてこれをふまえて解されていて、水川注を除き、いずれも如輪上人を比定する。渡辺氏の改訂説も、なお如輪上人説も並記して、自信なさのほどが知られる。

雨宿りをするために「遣り入る」のだから、それは屋根のある建物の下でなければおかしい。「廊」も「老」も仮名遣いは「らう」で同じ。「長老」で「如輪上人」だと人物を出しながら、そのあと一切その人が出てこないのもおかしいことである。「長老の許へ」と言ったのなら、その長老が出てきて応対するとか、ことばを交わすとかの場面

が続かなければ、不審である。「チヨウロウ」という言い方も不審で、普通に考えれば「千本の聖」（とはずがたり）であり「上人」であるはずであろう。ここは、中門が設けられているような、長い廊が続いている建物の、屋根の下へ女房の車を遣り入れたと見なければ、不自然である。

ただ古語辞典にも現代語辞典にも、「長廊下」（ナガラウカ。ナガロウカ。長く続いている廊下）の語はあるけれども、「長廊」「ナガラウ」「チャウラウ」という言葉は登録されてはいない。けれども「長い廊」であるはずだとすれば、ここは「ナガラウ」と読み「長廊」の文字をあてて考えるべきであろう（日本語として「チヨウロウ」の語は考えがたいから除外してよいであろう）。

六

ところで、「釈迦念仏一時礼讃、一時申さす」（②水川注・③浜口注）か、「釈迦念仏一時、礼讃一時、申さす」（④外村注・⑤渡辺注）なのか、区切り方が次なる問題となる。前記『徒然草』（二二八段）の記事により、「釈迦念仏」が一つの用語としてあったことは確かである。二月九日から十五日（釈迦入滅の日）まで、涅槃仏の像をかけ、遺教経を読誦し、終わりに釈迦牟尼仏の名号を唱える法会

であるという。同じ『徒然草』の前の段（二二七段）に、

六時礼讃は、法然上人の弟子、安楽といひける僧、經文を集めて作りて、勤めにしけり。その後、太秦善観房といふ僧、節博士を定めて、声明になせり。一念の念仏の最初なり。後嵯峨院の御代より始められり。法事讃も、同じく、善観房始めたるなり。

とある。「六時礼讃」は、一日を六時（晨朝・日中・日没・初夜・中夜・後夜）に分け、その度に、浄土往生の讃文を唱える方式。普通は、唐の善導の作った『往生礼賛偈』が用いられるという（岩波文庫本注）。とすると、「釈迦念仏」の「一時礼讃文」（日中分か）を、一時（二時間ほど）の間唱えさせたということになるうか。「礼讃一時」では、何の礼讃なのか不分明であろう。

終わりに近い部分の、「帰りさまに、尾張の守仲綱入道もとより隠りゐて侍りしがもとへ、かけて逃げ侍りし」とある「尾張の守仲綱入道」は、『とはずがたり』の後深草院二条の乳人であった人。二条の父久我雅忠が亡くなった時（文永九年八月三日）、殉じて出家し、「出家の後は、千本の聖の許にのみ住まひたれば」（とはずがたり・巻一）とあった、それから足かけ九年後の弘安三年、その隠居している場所を目指して逃げるように駆けていったというので

ある。「千本の聖」が誰であったかは不明（福田秀一注）とされているが、これは如輪上人（澄空）だったとしてよいであろう。千本釈迦堂（大報恩寺）からの帰り途で、いくらか洛中よりの場所に、その住まいはあったと見られる。雅有はその仲綱入道との交友もあったと知れるのであるが、どのような関係だったかは、なおよくわからない。

なお、六日と七日の二夜、花見に伴って行った女房の一人は、後宇多天皇内裏の中納言典侍であった。三月の最後の記事、二十七日の条の末尾に、「過ぎにし二夜の月と花とに伴ひし内裏の中納言典侍の許へ、散り残りたる桜につけて、申し送り侍りし」とあって、雅有から二首の歌が贈られ、また二首の歌が返されている。この女性は、後に後宇多天皇妃となり後醍醐天皇の母となった、藤原忠継女、藤原忠子、後の談天門院であった。

七

九日の日の花見は、四日が毘沙門堂、六日は毘沙門堂から持明院、七日は千本釈迦堂の花見で、いづれも京市中北郊の紅葉を見て逍遙したのを引き替え、この日は目先を変えて東山の花を尋ねたのである。

十三日の、「斎果つる程」の「斎」は「斎会」のこと。

僧に齋食を供えて行かう法会で、宮中の季御読経のことであろう。季御読経は、春秋の二季に衆僧を召し大般若経を転読せしめた公事で、四日間行われた。その最初の日の法会が終わるころ、一切経を見物にいった連中が宮中に帰参し、御所の一室で酒宴を開いたのであらう。「御所の屋」を、「賀茂社の建物か」(浜口『注釈』)としたり「齋会」を「一切経のこと」と解したりするのは、否であらう。賀茂社に「御所の屋」と呼べる建物はないはずで、一見物人が神社の建物に上がり込んで酒宴をしたりすることもありえないのではあるまいか。

終わりに近い「道とはなくて、一せいなどいふ」の部分の、諸注の解は、以下のとおりである。

② 「一声」の字をあて、歌謡・能楽用語と解して、「この遊女も、本芸ということではなくて、一声などを謡う」(水川『全釈』)。

③ 「一声」の字をあて、「朗詠・今様の詠誦法か」として、「この美人も、専門にするわけではないが、一声などをうたう」(浜口『注釈』)。

④ 「一声」の字をあて、「白拍子の歌謡にも「一声」という部分があった。ここはそれをさすか」として、「この美人も、専門ではないが、一声などを歌う」(外村『全

集』)。

⑤ 「一声」の字をあて、「朗詠今様の節の類か」とする(渡辺『集成』)。

いずれも「一声」の字をあてて解するのであるが、「一せいなどいふ」とある語法を無視している。ここは「一世」「二世」のそれであるべく、代々世襲してきた家の職業としての傾城ではなく、彼女たちの代になってからこの道に携わり始めた「一世」の意であるにちがいない。そう解してこそ、「などいふ」が生きてくるというものである。

本文中に取り上げた諸注は、以下のとおりである。

① 渡辺静子『春のみやまち』(影印校注古典叢書31、新典社、昭和五十九年四月)。

② 水川喜夫『飛鳥井雅有日記全釈』(風間書房、昭和六十六年六月)。

③ 浜口博章『飛鳥井雅有「春のみやまち」注釈』(桜楓社、平成五年三月)。

④ 外村南都子『春の深山路』(新編日本古典文学全集『中世日記紀行集』、小学館、一九九四年七月)。

⑤ 渡辺静子他『中世日記紀行文学全評釈集成』第三卷(勉誠出版、平成十六年十二月)。